も當時回鶻卽ち後代の例よりすれば Toquz Oγuz と稱せられたるべき名が、此の地方に知られたりしものなるべきは想像に難からざる所なりとす、されば Tabari の記せる此の名は、十世紀に於る知識によりて名けたるものには非ずして、此の事件の當時既に亞剌比亞人の間に知られたりしものなりと見んとす、果して然らば、回鶻が Toquz Oγuz として亞剌比亞人に知られしは、必ずしもその西遷後にはあらずといふべく、只だ此の時以前に於ては之が傳へらるゝこと極めて少かりしものといふべきのみ。

⑬ 唐代記錄に九姓回鶻なる語と共に、九姓胡なる語見ゆ、例へば新唐書回鶻傳に、建中元年張光晟が回鶻の使を殺したる記事中、「始回紇至中國、常參以九姓胡」とあり、後に之を九胡と言ひかへたり、余は始め九姓胡も鐵勒九姓を意味するものと考へしが、勿論こは不適當にして、ここに言ふ九姓胡はソグド人を意味すること明かなり。

⑭ 此の年次は新唐書吐蕃傳に見ゆる所に據る。

⑮ Reinaud, Géographie d'Aboulfeda, Introduction, p. CCCLXIV.

⑯ 此の地理書とは Reinaud が Anciennes Relation de l'Inde et de la Chine de deux Voyageurs Mahometans qui y allèrent dans le IXe siècle の名を與へたるものなり、此の中第一卷は八五一年になりしものと記され、而して Reinaud 氏によれば商人 Soleyman なるものゝ見聞を基としたるものとせらる、されど之につきては Yule 氏は Cathay and the Way Thither (II ed. Preliminary Essay, p. 126) に於てその不可なるを論じたり。

⑰ Reinaud. Géographie d'Aboulfeda, Introduction, p. CCCLX.

⑱ Massudi, Les Prairies d'Or I, p. 288.

補注① 舊新唐書地理志に見ゆる多覽葛、奚結、阿跌は突厥九姓で單なる九姓鐵勒には入らぬと考へる、と前田直典、十世紀時代の九族韃靼（東洋學報第三十二卷第一號九〇頁）に述ぶ。

② Marquart は、此處では Oγωρ を Uigur の音に當てたが、後一九一四年 Osttürkische Dialectstudien を著はし、その中にこの考を改めて、Oγωρ を以て Oguz の音に當るものとし、ρ は z の音を訛りたるものと見たり。（同書九二頁）